

『講左衛門さん、今日は、山岳信仰について話をしてくれるでまっすん?』

『そうなんじゃ。少し難しいかもしれんが、富士山が神仏の山として崇められるその理由が、山岳信仰と深い関係にあると思うんじゃよ。さて、上原大阿闍梨様が何故、千日回峰行という荒行をする決心をしたのか?それは「山岳修験への招待」という本に書かれているんじゃが、「師や兄弟子への憧れから」とおっしゃっているんじゃよ。特に心に残っている師僧の言葉が「修行する事によって50点の人間が、51点になる可能性がある」と、「この言葉を何度も聞くうちに修行は少しでも自分を成長させてくれる方法として存在していると思うようになった」ともお話しておるんじゃよ。ということはじゃ、山岳信仰というのは、単純に山に対する畏敬の念だけではなく、先人の英知が脈々と伝承されていることへの尊敬が、信仰という形態を作り出したんじゃよ。少し話は変わるんじゃが、富士山信仰で有名なのは富士講という信仰じゃ。富士講の開祖は、長谷川角行（はせがわかくぎょう）という人なんじゃが、角行は、当初修験道の行者だったんじゃよ。常陸国（一説には水戸藤柄町）での修行を終えて陸奥国達谷窟（悪路王伝説で著名）に至り、その岩窟で修行中に役行者よりお告げを受けて富士山麓の人穴（静岡県富士市）に辿り着いたんじゃ。そして、この穴で4寸5分角の角材の上に爪立ちして一千日間の苦行を實踐し、永禄3年（1560年）「角行」という行名を与えられたんじゃ。』

『角行という人も、修験道の行者だったでまっすん。修験道は凄いでまっすん。』

『角行という人に憧れた人々が講中を率いる先達となって、江戸時代になると富士山詣が盛んに行われたんじゃ。だがな、不思議なことに大寄友右衛門が先達となった大我講は、角行の富士講とは違うんじゃよ。富士講には、系譜というのが残されているんじゃが、その系譜に大我講は掲載されていないことが角行の富士講ではないことを明確にしていると思うんじゃよ。友右衛門は、富士講の丸仙講の講中だったんじゃが、新たに大我講を作った理由はまだよく分かっていないんじゃ。しかし、信仰というものは、人によって脈々と受け継がれていくもんじゃよ。それを忘れてはいけないんじゃ。富士山が文化遺産になったことを機会に、もう一度富士山との関わりを見つめなおしてほしいのう・・・』

『考えさせれる話でまっすん。次回は、どんな話をしてくれるでまっすん。』

『次回は、大我講の軌跡を話そうと思っておるんじゃ。大我講碑には、大我講だと分かる印が残されておるんじゃよ。その話をしようかのう・・・』

クニマツン
出生地 忍野村
山梨県水産技術センター
□癖 でまっすん...

ふじのだいがこうざえもん
富士大我講左衛門 年齢不詳
職業 大我講の先達^{せんだつ}
(先達とは案内責任者)

